

『枕草子』「二月つごもりごろに」の言説分析

——教材化にむけて——

武久康高

一 はじめに

本稿は、「枕草子」¹「二月つごもりごろに」の教材化にむけて、新たな教材分析の可能性について論述することを目的とする。方法として、(1)現行の教科書に採録されている「二月つごもりごろに」の「学習のてびき」および教師用指導書の分析から、そこで目指されている学習について検討し、問題点を指摘する。(2)言説分析の手法を援用し、「二月つごもりごろに」の教材分析および教材化の可能性を探る、といった順ですすめていくこととする。なお、「二月つごもりごろに」本文は以下のとおりである。

二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪少しうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうてさぶらふ」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の」とて、あるを見れば、懐紙に、
少し春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日の気色にいとようあひたる、これがもとはいかでか付くべからん、と思ひわづらひぬ。「誰々か」と問へば、「それぞれ」と言ふ。皆いと恥かしき中に、宰相の

御答を、いかでかことなしびにいひ出でん、と心一つに苦しきを、御前に御覽せさせんとすれど、上のおはしまして、御殿籠りたり。主殿司は「とく、とく」と言ふ。げに遅うさへあらんは、いととり所なければ、さはれとて、

空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きて、取らせて、いかに思ふらんとわびし。これがことを聞かばや、と思ふに、そしられたらば聞かじ、とおぼゆるを、「俊賢の宰相など、「なほ内侍に奏してなさん」となん定め給ひし」とばかりぞ、左兵衛の督の中將におはせし、語り給ひし。

(一〇二段。引用は和泉古典叢書本による)

二 現行教科書における「二月つごもりごろに」

「二月つごもりごろに」は、十を超える現行の高等学校用教科書に採録されており、いわゆる定番教材である。【資料1】は、それら「二月つごもりごろに」の「学習の手引き」を整理したものである。ここから、教科書が目指す学習の方向性を、おおよそ

ながら把握できよう。

【資料1】

A 作者の心情理解

◇作者の心情をたどる ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬

〈例〉作者の心境の変化を、順を追ってまとめてみよう。(7)
作者は、「公任の宰相殿」をどのような人物として受けとめているか。(9)・(10)

B 歌の読解・評価

◇「空寒み…」の趣向 ②⑥⑫

〈例〉清少納言が答えた「空寒み…」の歌には、どのような趣向がこらされているか。(12)

◇公任・俊賢らによる作者の歌の評価 ①④⑤⑥⑧⑨⑩⑪⑬⑮

〈例〉空寒み花にまがへて散る雪に」という返事は公任たちからどのように評価されたのか、考えてみよう。
(4)・(5)・(13)

「内侍に奏してなさむ。」には、俊賢のどのような気持ち
持ちが込められているか、考えてみよう。(11)

C 作者の人物像

◇作者の性格・人物像 ①⑧⑭

〈例〉作者はどのような人物だと思うか、話し合ってみよう。
(1)・(8)

※主語確認・文法は省略している。

Aは公任への返歌を逡巡する作者の心情把握を目指すもの、Bは和歌(「空寒み…」)の趣向を理解し、その和歌に対する俊賢らの評価を捉えるもの、さらにCは作者の人物像を考えるものである。本章段の「学習の手引き」は以上A～Cのように整理できる。

では、これらの「手引き」によって、どのような学習が目指されているのだろうか。その傾向を、多くの教科書が「学習のてびき」として挙げるa「作者の心情をたどる」およびb「公任・俊賢らによる作者の歌の評価」両項の分析から明らかにしたい。

a 「作者の心情をたどる」

「作者の心情をたどる」活動に関しては、次に挙げる二通りの指導が代表的なものである。

「公任の宰相」は、和歌をはじめ各方面に通じた才子であったので、歌の贈答について筆者がひどく心をくだいたことを、原文を通じて把握させる。

(右文書院、国語II④、【指導の目標】)

さまざまな人の心の微妙な動きを、自由に推測しながら、古典の世界を読む楽しさを生徒に教えることに、この教材の指導の、一つの重点を置きたい。

(第一学習社、国語②、【学習指導の要点】)

前者は、公任の存在の大きさが作者の心をくだかせた点を把握すること、また後者は、細かな心情のゆれを自由に想像させ「古典の世界を読む楽しさ」を教えることを、それぞれ指導の目標としている。ここで前者は、作者の逡巡を引き起こさせるようなこの時代における公任の存在の大きさを知ること、また後者は「その

人物とともに虚構の世界をもう一つの現実として生き、イメージ豊かにその人物をとらえる」学習として位置づけられる。

b 「公任・俊賢らによる作者の歌の評価」

この「学習の手引き」は、学習者が作者の返歌はどのようなものか(「空寒み」の趣向)を理解した上で、その歌および作者に対する俊賢らの賞賛(内侍に奏してなさむ)の理由を考えるものである。ここでは、和歌の鑑賞——特に漢詩(「白氏文集」南秦雪)の和様化ということ——の仕方を知ることと共に、和歌・漢詩の教養が重視された当時の価値観を知ることが学習内容として想定されていると思われる。特に後者の学習内容に関しては、前に引用した教師用指導書の【指導目標】をみても明らかである。

「二月つごもりごろに」では、人間関係の中で微妙に揺れ動く人の心情の変化と、宮廷貴族の価値評価について考えさせる。

(第一学習社、国語二②、【教材の主な指導目標】)

漢詩の詩句が、みごとに一首の和歌に翻案されている、その贈答の巧みさを味わわせ、そうした教養が尊重された宮廷社会の实体を推察させる。(右文書院、国語II④、【指導の目標】)

以上 a b の「学習の手引き」の検討から、「二月つごもりごろに」で目指されている学習についておおよその傾向が把握できよう。しかし本章段の学習を考えるにあたっては、さらに「自讃譚」という本章段の位置付けを問題にしておく必要があるだろう。管見に及んだ教師用指導書は、そのすべてが本章段を「自讃譚」として意味づけている。例として、二出版社の教師用指導書を挙げておく。

日記的・実録的章段。二月下旬の寒い日、藤原公任から、「白氏文集」の一句をふまえて「少し春あるこちこそすれ」という課題を出された清女が、同じく「白氏文集」をふまえて「空寒み花にまがへて散る雪に」と返事し、みなが清女の才能をほめたという、清女自讃譚の一つ。

(第一学習社、国語二②、【大意】)

この段は公任ほどの人から上句を求められるほど自分が認められた存在であること、そしてその相手をあつといわせるような機才を発揮したことを語る自讃談ということになる。

(筑摩書房、古典講読⑩、【鑑賞】)

周知の通り「自讃譚」という語は、「枕草子」を評するキーワードの一つとして長らく研究の世界および教室で親しまれてきた。しかし一方で小森潔は、この「自讃譚」という言葉自体が「ことさら清少納言の個性を措定した上でそれを弾効するような」ものであることを指摘する⁽³⁾。つまり「自讃譚」という言葉のうちに、自分が賞賛された話を書く清少納言という人物の性格を措定し、「それを弾効」していくようなまなざしが内在化しているということである。こうしたあり方は、例えば「作者はどのような人物だと思ふか、話し合ってみよう」(C「作者の人物像」①・⑧)と、学習者に作者の人物像あるいは性格を措定させ、それについて話し合わせる学習などに窺うことができる。

さて、ここまで「二月つごもりごろに」の主たる「学習の手引き」および教師用指導書の文言を分析対象として、本章段において目指されている学習について検討してきた。本節の最後に、こ

これらの学習がもつ問題点について指摘したい。

まず、清少納言の心情のゆれを自由に想像し「古典の世界を読む楽しさ」を体験する学習についてであるが、もちろんこの活動が学習者の想像力や豊かな感性を育むことにつながりうることは否定できない。しかし一方で、はたして現代の高校生にとつて、和歌の贈答に悩む作者の心情を自由に想像することが「古典の世界を読む楽しさ」につながるのか、という疑念はぬぐい去れない。むしろそこに必然性がない限り、「古典世界を読む無意味さ」を感じるばかりであろう。ここには学習者の興味関心と学習内容との懸隔を指摘しうる。

また、作者の逡巡をまねいた、この時代における公任の存在や「公任・俊賢らによる作者の歌の評価」から、和歌や漢詩の教養が重視された当時の価値観を知るといふ学習は、今後学習者が古典作品に接する上で役立つものである。しかし国語科にとつてより重要な課題は、当時の価値観を知ることではなく、その価値観のもとにいかなる言語行為が営まれ、そこにどのような主体が生成されているのかといった「人と言葉と社会との関係」を問うていくことであろう。この点については次節以降、「二月つごもりごろに」の言説分析を通じて具体的に論述していきたい。

最後に、「自讀譚」として本章段を読むことに起因する問題点であるが、これは清少納言の性格探求にその中心がおかれてしまい、最終的にステレオタイプの清少納言像を再生産していくのみの学習となる可能性が大きいと考えられる。このことによつて如何なることを学んでいくのか、大いに疑問がのこるところである。

三 「二月つごもりごろに」の言説分析

では、どのような読み、および学習を志向すべきなのだろうか。そもそも『枕草子』にかぎらず全ての古典テキストは、現代とは異なる時空で生成されている。よつてそこで取り上げられる内容も現代とは異なる世界である。もちろんここから古典テキストの「他者性」を利用した指導も考えられようが、稿者は現代の学習者にとつてリアルに感じられるような「問題領域」を古典テキストから発見し、この「問題領域」をめぐつて古典テキストと学習者が対話することこそ重要だと考える。むしろこの「問題領域」は、現代の学習者が抱え持つそれと通底していなければならぬが、こうした古典テキストが開いている「問題領域」を探る一つの方法として、本稿では言説分析の手法を援用し、「二月つごもりごろに」の分析を試みる。

三―一 和歌をめぐるやりとり

「二月つごもりごろに」は、公任ら貴人たちが下句（「少し春ある心地こそすれ」）を贈り、それに登場人物である清少納言（以下〈清少納言〉とする）が上句（「空寒み花にまがへて散る雪に」）を付けて答え、評価されるといった構図になっている。その際、本章段の中心である両者の贈答は、公任の下句を受け取つた後の〈清少納言〉の発言（「げに今日の気色にいとようあひたる、これがもといかでか付くべからん」）からも窺えるように「今日の気色」をめぐるものであった。では本章段において「今

日の気色」はどのように語られているのだろうか。そこで「今日の気色」が示される冒頭部分について検討してみる。

本章段は「二月つごもりごろ」と時期を提示するところから語り出されるが、この時期は落花の季節として和歌世界において形象化されていた。

二月つごもりがたに、人人きて物がたりなどして、はなのちりにけるさうざうし、などいふに

いたづらにかへらん事を思ふかな

はなのをりにぞつぐべかりける (和泉式部集・七七八)

またこの時期の強風(「風いたう吹きて」)や、春の曇り空から降る雪(「空いみじう黒きに、雪少しうち散りたる」)も、それぞれ落花と結びつけられた用例を和歌から拾うことができる。

二月つごもりがたに、風のいみじう吹くに

花ちらす春のあらしは秋かぜの

身にしむよりも任しかりけり

(和泉式部集・二四)

ひさかたのそらもくもりてふるゆきは

風にちりくるはなにざりける (西本願寺本躬恒集・三七九)

つまり本章段冒頭部分は、その日の自然がそのまま描写されているというよりも、和歌世界のモードが用いられて語られていると考えられる。なおこの冒頭部分に関して、和歌の典拠とされる『白氏文集』「南秦雪」が影響しているとする指摘がある。稿者もこの見解に異論をはさむものではないが、本稿では特に、冒頭部分の語りと和歌世界の言表との類同性に注目したい。

さて、漢詩世界に触発されながらも落花を連想させる和歌世界

のモードによって語られた「今日の気色」は、〈清少納言〉の上句に必然性を持たせる語りとしてテクスト上で機能している。つまり冒頭部分の語りの存在によって、〈清少納言〉の歌句(「花にまがへて散る雪に」)が、「今日の気色」にふさわしい「雪を落花に見立てる」和歌の常套表現を用いて答えたという意味性を帯びるのである。

このように、冒頭部分での和歌世界のモードの提示、またそのモードが用いられた「今日の気色」をめぐる公任と〈清少納言〉の贈答など、本章段は和歌に関わるモードのもとに語られていると捉えられる。

また本章段にみられるような、教養ある貴人が女性に和歌を贈り、それに女性が答え、評価されるといった言表は、同時代の諸テクストに散見される定型的なものである。ここからも本章段が、これら同時代の諸テクストと同様の、和歌をめぐる貴人と女房とのやりとりとして語られているといえよう。

三二 女性と漢文

ところで、本章段はその贈答歌の典拠として『白氏文集』「南秦雪」が指摘されて以来、漢詩の知識を媒介として貴人に認められる清少納言という理解が一般的である。このことは「内侍に奏してなさん」という評価語の背景に、内侍⁽⁵⁾真名に堪能といったコンテクストが存在するところからも指摘できる。例として「簞集」『栄花物語』を挙げておく。

れいのふみよみてないしになさんの心ありて、おやはふみを

しふるなりけり、

(篋集・一六詞書)

ただ、宮仕をせさせんと思ひなりて、先帝の御時に、おほやけ宮仕に出し立てたりければ、女なれど、真名などいよく書きければ内侍になさせ給ひて、高内侍とぞ言ひける。

(『栄花物語』さまざまのよるこび)

つまり「清少納言」は、その真名の才によって内侍にふさわしいと評価されたのである。

では、「内侍に奏してなさん」と真名の才を評価された「清少納言」の下旬はどのようなものであったのだろうか。前述したように「清少納言」の下旬、特に「花にまがへて散る雪に」は「雪を落花に見立てる」という和歌の常套表現によって詠まれたものである。これをその典拠と目される「南秦雪」との関係でいえば、句中の「多飛雪」の箇所を和歌的な觀念によって捉え返し、表現したとすることができる。しかし一方「空寒み」という表現については、当時の用例が確認されないうため、鄭がいうように「公任の句が踏まえた『少有春』の理由に当たる『山寒』の部分原詩第三句の『雲冷』の意味と混合させて『空寒み』という句を創り出し」たものと想定される。

ところで「花にまがへて散る雪に」の表現に注目し、漢詩世界に触発されながらも和歌文脈によって詠んでいくことを本章段における「清少納言」の歌の特質と考えた場合、同じ「南秦雪」中の「少有春」をほとんどそのまま歌句とする公任の下旬「少し春ある心地こそすれ」との差異は明白である。むしろ、両者の差異を強調するような語りながされているといえよう。このことは従

来の「漢詩の知識を媒介として貴人に認められる清少納言」という理解とは異なる本章段の読みを促すことになるが、この問題を考えるにあたっては、男性Ⅱ漢文、女性Ⅱ和歌といった当時の言説状況を視野に入れる必要がある。以下、本節では当時の言説のありようの一端を記述し、次節においてこの言説の本章段の語りに対する作用を考察する。

当時漢文は、平安文学の「正統」であるといった認識があり、男性が担うものとして考えられていた。これは真名自体が公文章などを記す「公」の言葉として存在していたことと関係しているが、特に「文」(漢文・漢詩)の問題にそくして考えてみると、「文」自体が政教的(儒教的)な機能を持ち、この「文」の力によって国家を治めていこうとする律令体制下の理念的世界観(「文章経国思想」)がその根底にあると考えられる。つまり「文」は単なる風流に留まらず、政治的に必要な資質として(理念的にはあるが)認識されていたというわけである。これが「文」を平安文学の「正統」とし、国家や政治を担う「中心」である男性の専有物として考えるようになった一要因であるといえよう。例えば次にあげる「天徳内裏歌合」においても、男性Ⅱ「文章」(漢詩)、女性Ⅱ「和歌」といった区分意識が認められる。

天徳四年三月卅日己巳、此日有_二女房歌合事_一。去年秋八月、

殿上侍臣鬪詩。爾時、典侍命婦等相語曰、男已鬪_二文章女宜_一合和歌。

(天徳四年三月卅日内裏歌合)

なお、ここで注目しておきたいことは、傍線部(「男已鬪文章女宜合和歌」)の発話者が女性(「典侍命婦等」)だということであ

る。すなわち、女性の側も自らの担うべきジャンルを「文章」ではなく「和歌」と規定しているのである。ここにあらわれている女性の側、特に「典侍」のジェンダー意識は本章の語りを考える上で重要である。

さて、こうした文学ジャンルにまつわるジェンダー意識は、漢文を習得している女性を排除していく言表からも確認できる。

母上は高内侍ぞかし。されど、殿上えせられざりしかば、行幸・節会などには、南殿にぞまいられし。それはまことしき文者にて、御前の作文には文たてまつられしはとよ。少々のをのこにはまさりてこそきこえ侍りしか。(中略)「女のおまりにごえかしこきは、ものあしき」と、人の申すなるに、この内侍のちにはいとみじう墮落せられしにしも、そのけとこそはおぼえ侍りしか。(「大鏡」内大臣道隆)

引用傍線部分では、「御前の作文」に「文」を奉り「少々のをのこ」よりも勝つていた高内侍が、その「あまりにごえかしこき」ゆえに「いとみじう墮落」したと語られている。ここからは小町や清少納言の零落譚と同様の構図、つまり男性にとつて不都合な(才があるなど)女性のあはれな末路を語ることで、男性と対等、もしくは優位に立つ女性を排除していく言表の存在を指摘できる。また次に引用する「紫式部日記」中の女房の発言は、「をんな」が「真名文」を読むこと自体すでに悪とする語りである。

片つかたに、書ども、わざと置き重ねし人もはべらずなりにし後、手ふるる人もことになし。それらを、つれづれせめてあまりぬるとき、ひとつふたつつきいでて見はべるを、女房

あつまりて、「おまへはかくおはすれば、御幸ひはすくなきなり。なでふをんなな真名文は読む。むかしは経説むをだに人は制しき」と、しりうごちいふを聞きはべるにも、物忌みける人の、行末いのち長かめるよしども、見えぬためしなりと、いはまほしくはべれど、思ひくまなきやうなり、ことはたさもあり。(「紫式部日記」)

このように、当時の女性にとつて「真名文」は不必要なもの、「幸ひ」を少なくするものといった言表の存在が窺える。しかし一方で山本淳子は、同様に「紫式部日記」の分析を通じて、女性でも「漢才が個の世界に閉じ込められる限り」罪はなく、むしろ「才がり」というかたちで社会にさらされる時、いけない結果を生む」というように、「才がり」こそ批判されていると論じる。

この発言は、例えば「紫式部日記」中の、紫式部が彰子に「いとしのびて、人のさぶらはぬもののみまひまに」「薬府といふ書二巻をぞ、しどけながら教へ」ていた語りなどをよく説明しよう。

以上、当時の女性と漢文にまつわる言説の一端を記述した。ここに整理しておく、

・ 男性⇨漢文、女性⇨和歌といった文学ジャンルにまつわるジェンダー規範があること。またその意識は、「典侍」という真名に堪能とされる女性の発言にもみられること。

また女性と漢文という組み合わせに関しては、次のようなものが認められた。

・ 漢文という存在自体から女性を遠ざけようとする。これは女性が漢文を読むこと自体が悪いことだとされる。

・女性が漢文とふれあうこと自体を否定するのではなく、そこで得た知識を「才がり」というかたちで社会にさらすことを批判すること。

ここで後者の言表は、一条朝において「漢詩文が貴族の生活の中の優れて私的・遊興的なところに位置するようにな」り「私的世界を居場所とした女性たちと漢詩文との間の垣根が低くなった」ため、「私生活で男性と渡り合うために女性にもそこその漢詩文教養が当たり前にいりようになつた」¹⁾状況と関係している。この点に関してはもう少し子細な検討が必要なのであるが、本章段を読むにあたっては、一条朝において女性が漢文知識をひけらかすこと（「才がり」）に対して、批判的な言説が存在していたことを確認しておきたい。

では、この女性と漢文にまつわる言説は本テキストの語りにとどのような作用を及ぼしているのだろうか。以下、前に提起した問題点（漢詩を典拠とする公任と〈清少納言〉との和歌表現の差異および真名の才によつて評価される〈清少納言〉といった語りの意味性について）や三一で論述した「和歌をめぐるやりとり」の語りと絡め、次節において検討したい。

四 「二月つごもりごろに」の言語行為

さて、「二月つごもりごろに」の中心が公任と〈清少納言〉との和歌のやりとりであることはすでに述べた。これを言説との関係から再度検討する。

まず〈清少納言〉に贈られてきた公任の下句であるが、この歌の特徴は、典拠である「南秦書」中の「少春」をそのまま読み下した句となつている点。つまり、和歌という形式をとりながらも、そこに白氏句の存在を主張する歌となつているのである。これを前の漢文と女性の議論にそくしていえば、さしづめ（女性ではないが）「才がり」ということになる。

こうした下句を突きつけられた〈清少納言〉は、その返歌にとまどう。もちろんここには公任という存在の大きさが関係しているが、その和歌世界のモードにそくした返歌のありように着目してみると、〈清少納言〉を抑圧していたものとして、当時の文学ジャンルにまつわるジェンダー規範を挙げることができる。つまり、男性貴人から〈男性性〉の刻印された漢詩句を明らかな典拠としてもつ歌を贈られた〈清少納言〉が、苦渋のすえに〈女性〉が担うべき和歌世界のモードに従つて返答した、というわけである。むしろ一方では、「公任の句が踏まえた『少春』の理由に当たる『山寒』の部分原詩第三句の『雲冷』の意味と混合させて『空寒み』という句を創り出」すなど、白氏句への理解のほどを示すことも忘れていない。すなわち、公任の下句に対して、その典拠とする白氏句への理解を示しつつも和歌世界のモードに従つて返答した、ということになる。こうした〈清少納言〉のありようは、男性⇨漢文、女性⇨和歌といったジェンダーの規範に対する越境を志向しながらも、その期待される枠内で表現行為を営む〈女性〉の姿である、といつてよいだろう。

さて、こうした〈清少納言〉の答えは「内侍に奏してなさん」

と俊賢から評価される。前述したようにこの時代は「内侍」＝真名に堪能というコンテクストが存在し、ここでもその真名の才が認められての評価だと考えられる。すなわちここで俊賢は、「才がり」というかたちで漢文知識をひけらかすのではなく、あくまでジェンダーの規範内で答える「清少納言」の真名の才を認め、評価しているのである。ここには、漢文に関連した表現行為の際に期待される「女性像」に従い、評価された「清少納言」の姿が語られているといえよう。

このように本章段には、女性と漢文にまつわる当時のジェンダー規範のもと、その望まれる「女性像」に従って表現をおこなう主体（＝「清少納言」）の姿が語られているのである。

なおこうした当時のジェンダー規範の抑圧は、本章段を語るという位相においても同様に指摘することができる。

三―で言及したように、本章段はあくまで和歌をめぐるやりとりとして語られている。また、贈答の中心となる「今日の気色」も和歌世界のモードにより語られたものであった。ここで注意すべきは、「清少納言」によつて公任の下句が「げに今日の気色にいとようあひたる」と位置づけられていること。何度も言及しているように、公任の下句は「南秦雪」中の「少有春」を典故とした表現である。これをテクストの上では「今日の気色」、つまり和歌世界のモードによつて語られた冒頭部分の自然描写に「いとようあひたる」ものだとしているのである。つまり、公任の下句から白氏句をよみとつたという語りのスタンスをとるのである。

このような語りが行われるのは、男性＝漢文、女性＝和歌といったジェンダー規範、また漢文知識をひけらかすことへの批判的言説に対する自己防衛の策だと捉えられよう。つまりここには、言説の抑圧のもと表現をおこなう主体のありようが窺えるのである。

五 おわりに ―二月つこもりころに「教材化」にむけて―

本稿でおこなった分析は、テクスト上の叙述をテクストをとりまく社会との関係の中で生成されたものとして捉え、そこからテクストの書き手あるいは登場人物の言説に対する態度を捉えていることとするものであった。その結果として「二月つこもりころに」からは、ジェンダー規範という当時の支配的言説のなかで、その抑圧を受けながら言語行為を営む主体のありようが看取された。つまり、ジェンダーの越境を志向しながらも、期待される「女性像」にそつて言語行為を営む／営んでしまう主体の姿である。

このように、自らをとりまく社会の規範や通念を形成している言説とそこでの言語行為や主体生成のありよう、つまり「人と言葉と社会との関係」を問題化していくことは、同様に「人と言葉と社会との関係」の中を生きる現代の高校生にとつても、自己や社会を再度見つめ直すという点で重要なことである。例えば本章段から取り出しうる、ジェンダー規範とそこでの主体のありようといった「問題領域」は、いまだに根強く残る「男らしさ」「女らしさ」を強要する言説に一方で安住しつつ、他方において反発も感じる学習者にとつて格好の教材となるであろう。そこから、

現代のどのような領域や場面でこの言説が根強く残り、いかなる社会を形成しているのかといった視点を得ることや、自己の見方やふるまいを見つめ直す機縁となりうるだろう。

以上のような「問題領域」に学習者を出会わせることは、学習者たちとは無関係な世界に住む古典テキストの登場人物に対してひたすら同化あるいは心情理解を求めることや、当時の価値観をただ享受させることよりも、よほど重要な学習となりうることを考える。こうした「問題領域」を核とするような教材化をこそ、今からの古典教育において目指していくべきではないだろうか。

注

(1) 管見に及んだ「二月つごもりごろに」を採録している教科書は以下の通りである。

- 【国語Ⅱ】①東京書籍、国語Ⅱ古典編、589。②右文書院、新国語Ⅱ、602。③尚学図書、新選国語二改訂版、608。④第一学習社、高等学校改訂版国語二、611。⑤第一学習社、高等学校改訂版新訂国語二古典編、613。【古典Ⅰ】⑥教育出版、古典Ⅰ、502。⑦角川書店、高等学校古典Ⅰ、510。⑧東京書籍、古典Ⅰ、554。⑨大修館書店、高等学校古典Ⅰ、557。⑩大修館書店、精選古典Ⅰ古文編、558。⑪明治書院、総合古典Ⅰ、562。⑫旺文社、高等学校古典Ⅰ改訂版、565。⑬第一学習社、高等学校改訂版古典Ⅰ古文編、567。【古典講読】⑭角川書店、徒然草・枕草子・評論、595。⑮筑摩書房、古典随筆選、522。

(2) 世羅博昭「古典の説話・物語を文学として読む指導を」(田

近洵一・浜本純逸・大槻和夫編『たのしくわかる高校国語Ⅰ・Ⅱの授業〈古典〉あゆみ出版、一九九〇・一〇、一三頁)

(3) 小森潔「〈性差〉を越えて―清少納言と中宮定子―」(枕草子 逸脱のまなざし)笠間書院、一九九八・一、六頁。

(4) 鄭順粉「枕草子『二月つごもりごろに』段の和歌をめぐって」(中古文学)一九九七・五、参照。

(5) 針本正行「枕草子自讃譚の構造(二)―三巻本九十八段を中心として―」(江戸川女子短期大学紀要)一九九〇・三三。

(6) この具体的な用例・分析については拙稿「枕草子」の言説分析(1)―二月つごもりごろに―の場合(1) (広島大学教育学部紀要)第四十八号第二部、二〇〇〇・三三。

(7) 女官に真名の知識が必要とされたことは、志村緑「平安時代女性の真名漢籍の学習」(日本歴史)一九八六・六。

(8) 注4鄭論文、一三頁。

(9) 中島和歌子「漢風暗黒時代」の中で(叢書 想像する平安文学 第一巻「平安文学」というイデオロギー)一九九九・五、勉誠出版、五八〜五九頁)など。

(10) 山本淳子「真名書き散らし」ということ」(国語国文)一九九四・五。

(11) 注10山本論文、二〇〜二二頁。

(12) 本稿のようにジェンダーの視点から「枕草子」を論じたものとして、注3や「枕草子の女/男」越境することば(注3 同書)など小森潔の一連の論文がある。特に後者の論文は、本稿を執筆する上で大きな示唆を得た。

(広島大学大学院)